

小説作品にみる戦争体験¹⁾

L'expérience à la guerre que l'on lit dans les romans japonais

佐々木 涇
SASAKI Thoru

はじめに

私には戦争体験がないことをまずことわっておきたい。思えば小学校以来被害者意識のみを植えられた思いがある。その一番よい例は、「原爆の子」「ひめゆりの塔」「長崎の鐘」「十三階段への道」などの映画作品を学校ぐるみで先生たちに連れられて見に行ったことである。いずれの作品も戦争の残虐さが強烈に印象に残っている。本論では次の作品を取り上げながら、内容を追ひ、作品のテーマもしくは作者の考えを探っていく。火野葦平『麦と兵隊』、阿川弘之『雲の墓標』、大岡昇平『野火』、野間宏『真空地帯』、五味川純平『人間の条件』『戦争と人間』六点である。

1. 中国・満州で苦しむ日本人

まず五味川純平の『人間の条件』から中国・満州で生まれた日本人二世の苦しみを見ておきたい。戦争の意味を考えるとときには単に「戦争」、「戦闘」だけを見るのでは片手落ちであり、国際情勢、国内政治、経済、文化、国民性、個人の状況などあらゆる面からとらえなおす必要がある。そのすべてを見直すことは容易ではないので、とりあえず一つの状況として戦前の中国での様子、つまり日本の国策、戦略にみあった企業に働く人間を見るために、『人間の条件』の第1部、第2部から知っておきたい。

1部と2部は、このあと注目すべき部分を詳しく見ていくが、この作品のあらすじの概略を記しておこう。客観的には侵略者のかたわれに組み込まれてしまっている梶は、日本人であることと「良心をもつ人間であること」の板挟み状態に置

かれていることが描かれている。3部4部は日本陸軍の世界、実際には関東軍であるが、軍隊組織に組込まれた梶が描かれる。兵役につくことで、日本人であることの宿命がゆえに、日本の世界に取り込まれ、その内部での非人間的な扱いに抵抗する梶が描かれる。5部6部ではソ満国境で生き延びた梶が日本人であるが故の敗残兵としての状態が描かれる。梶が常に妻、美千子のもとへ帰ろうとする思いでつらぬかれていて、日本人避難民と共に行動する逃避行やソ連軍の捕虜収容所でのできごとが描かれている。日本兵捕虜を使役に使うために日本軍の階級制を利用するソ連軍の捕虜の扱いからスターリニズムの本質を見る、つまり人間として扱わない。梶はこれに抵抗しながら収容所を脱出するが、美千子のもとへ辿りつくことができずに厳冬のなかでのたれ死にになってしまう。

さて、注目すべき部分として日本企業などが中国で何をしていたか、であるが、梶がたずさわった仕事を通じてみてゆく。梶が勤務する鉄鉱会社は、日本企業の中国における収奪の一例である。むろんこのことを明確に意識し、梶自身は矛盾とは思いつつもこの会社に勤務している。戦時のため鉱石採掘の現場では増産が求められてはいるものの能率があがらない。ここで梶が提言したのは、中国人労務者を「より人間として扱う」ことで能率を上げようとした。たとえ植民地であっても、また植民地であるからこそそのような扱いが必要であるとした。梶の労務管理の基本的な考え方は「人間を人間として扱うこと」であり、この基本的な考え方は、梶の生き方の姿勢でもある。これが会社側に受け入れられ、召集免除と引き換えに、この管理の実践を梶は求められた。梶は美千

1) 1996年度総合科目の「戦争の記憶と戦後50年の諸相」講義内容をまとめたものである。

子と結婚して赴任する。最初に梶が取り組んだのは一般工人の問題でいかに生産能率と就労率をあげるかである。一般工人とは中国人労働者で、彼らの生産能率と就労率が低いことから、梶は採鉱の請負制度と工頭のピンはねの改革に着手し、強制的に改組させた。請け負っている工頭からは反発を受けるが結果として成功し、梶は本社からの表彰を受ける。次に引用する部分は、締め上げて働かせるか、待遇をよくして働かせるかという問題に対して、中国人は金さえあれば、食うことと博打と女に金を注ぎこむだけでだめだとする工頭らの意見に対する梶の発言である。

これは僕の想像です。何も根拠はありません。日本人の戦争に、何故支那人労働者が協力しなければならないかということです。日本人に協力して生活を享受している者もいます。長いものに巻かれて生きている者もいることはあります。けれども、そのどちらでもない者もいるでしょうから。満州に天照大神を移植しても根がつかないのと同じように、日本人が日本人の戦争の目的のためにいくら支那人を…… (第一部18)

この梶の考え方には「支那人労働者」を人間としてみなす姿勢がある。ただ牛馬のごとく扱う他の現場監督や工頭とは違う。彼らとて人間であり、考える力をもつ人間だからこそ、その心のうちを思いやって、当の相手の意識にそって考えようとしている。梶の物差しは、同僚たちとは明らかに違う。個人的な部分での偏見を持って中国人を見るのではなく、国と国、民族と民族、と見なしており、立場を対等としている。そのうえで、中国人を一様とはせず、様々な考え方、つまりそれぞれ違いがあると認識している。もちろんこのような考え方は同僚たちに疎んじられ、攻撃と皮肉たっぷりの反撃を受ける。

増産のために会社側は、中国人捕虜を憲兵隊から受け入れ働かせることにする。憲兵隊は捕虜としているが、ある村で日本軍が虐殺をしたあとの男をかりあつめたものに過ぎない。これが特殊工人の問題で、憲兵隊の捕虜の扱い方はおよそ人間的ではなく、貨車に積みこんで梶らに引き渡す。これを見た梶は、捕虜を人間として扱いたいと思う。梶は彼らを二十日間静養させた後、就労させる。梶の考えによらない会社側の人間的扱いのご

とく見える処置を記しておこう。それは慰安婦を鉄条網の中に送り込むことである。特殊工人たちの腹を満たし、性欲を満たすことで就労の効率をあげようとするのは明らかである。だが電流の流れた鉄条網の囲みから逃亡者が続出する。逃亡者が出ることで苦しむ梶の立場を鉄条網の中から見つめる王享立は、梶が他の日本人とは違うと見抜き、梶に信頼をおく。梶に紙とペンを求め、手記を書いて梶に渡す。

王享立の手記には、王享立が病気の保養で来ていた村での虐殺のできごとが書かれている。17歳の少女が日本兵二人に暴行され、村人が日本兵一人をつかまえたが、もう一人は逃げ帰った。日本軍はその報復として村を焼き打ちし、至る所で掠奪、暴行をし、王享立の妻も辱めを受けて殺された。さらにその後捕虜として扱われてきたことを記しながら、王享立は日本人のことを侵略者として鋭く指摘する。

日本人ハ自分自身ヲ世界ニ冠タル民族ト思イ、「神州不滅」ヲ信ジテイマス。或イハ信ジョウトンテイマス。……(略)……コウイウ傾向ハ、大ナリ小ナリ、ドノ民族ニモアルコトデスカラ、取り立テテ云ウ必要ハナイカモンレマセン。トコロデ、タトエバ日本人トイウノハ、日本ノ政治、経済、社会、家庭、教育トイウ環境ノナカデ、長イ間カカッテ作り上ゲラレタ人間群ヲ謂イマス。ソノ人間群ノ中カラ作り出サレタ何百万トイウ日本軍隊ハ、中国大陸ノ至ルトコロデ、前記ノヨウナ暴行、殺人、掠奪ヲ行イマシタ。彼ラノ行クトコロ、コノ種ノ現象ガ起ラナカッタトコロハアリマセン。(第二部2)

梶はこの手記に登場する日本人とは違うことを強調するが、王享立は冷ややかに言う。

或る観点から云うと、梶さんがその違いを意識しているなら、その違いを発展させるか、消滅させるかで、あなたの人間が決るのではないだろうか？ どちらを選ぶかは、あなたの随意だが。(第二部2)

梶にこの「発展させるか否か」の試練がくる。王享立らに逃亡を止めさせるために梶自身が管理している間は、ひどい扱いをしないことを約束する。しかし、予想だにしない事件が起きる。鉄条網が張りめぐらされている坑内で、特殊工人

の何人かが現場監督の暴力に耐えきれず逃げ回った。来合わせていた憲兵はこれを逃亡と見なし、七人の処刑を通告し、梶を立会人とする。つまり梶の立場の究極点での試練である。王享立は「訂正のきかない過ちを犯すか否かの決定的な瞬間」だと指摘し、さらに続ける。

梶さんは、私の見るところ、人間を擁護する立場を取りながら、戦争を擁護する職業に悩み続けていたようだ。これは、誤謬と過失の長い連続だった…(略)…けれども、これにはいつか訂正する機会があるだろうという希望が持てたでしょう。

今日、これから来る瞬間には、その希望はない。……(略)……

言うまでもなく、その瞬間が、人道主義の仮面をかぶった殺人狂の仲間になるか、人間という美しい名に値するかの分かれ道です。……(略)……

梶さんは暴力の支配の下では、人間は孤立化し、無力化するという敗北感に陥っているのです。それも、あんた自身で考えているよりは、ずっと深い程度に…(略)……

そして梶さんは、自分で思っているほどには、人間を信じてはいない。あんたがどう考えようと、人間には人間の仲間が、いつでも、必ず、何処かにいるものです。互いに発見し合って、手を握り合えばいいのです。非常に文学的な云い方だが、この世界は、決して殺人狂の世界にはなりません。(第二部2)

厳しい指摘である。王享立の言う「暴力の支配の下では、人間は孤立化し、無力化するという敗北感に陥っている」のは、梶ばかりではない。当時の良心を貫こうとする日本人は皆そうであったろう。否、人間が良心を持つ限り、どんな時代にあっても一度はこの敗北感に陥るはずだ。この状態から脱するためには、悪事の大小を見定めて自らを説得し、納得して自分が生きるためとして内部で合理化する。これを生きるための知恵として身につけ、生きるのが人間だ。梶の場合は王享立の指摘する「人間を信じてはいない」点である。つまり彼は「人間の仲間」を発見しようとはしないから、孤立する。梶にとっての「仲間」は王享立に他ならない。気がついたのは王享立が逃亡してからである。

逃亡者を処刑する場に憲兵から立会うことを命令された梶は三人が斬首された後、中止させる。この梶を憲兵が斬ろうとすると王享立がリードし

て「止めろ」と連呼し、捕虜である特殊工人たちが立ち上がり迫る。「仲間」の登場である。憲兵は処刑を中止し、梶を連行する。梶の自宅で王享立の手記を発見した憲兵は、王享立との関係を拷問で自白させようとする。その一方、梶の不在中に王享立は逃亡してしまう。これを釈放後に聞いた梶は喜ぶが、それも束の間で梶自身に召集令状が来る。

梶は中途半端ではあったが、憲兵隊の「捕虜」を「人間として扱う」ことでかろうじて「良心」を守った。しかし、戦闘のさなかではこの梶のような思いは吹き飛ばされ、生きるか死ぬかの選択のみとなる。我々は植民地支配の中でもこのように苦しんだ人間、日本人がいることを知っておく必要がある。中国を植民地とし、そこで君臨する日本人の存在に、すでに罪があり、原罪であるという認識をしておく必要があるだろう。たとえ、その地で生きる日本人が君臨する姿勢がなくとも、中国人からそう見られることは明らかである。

2. 領土獲得の中での徐州会戦

1937年7月7日の廬溝橋事件は北支事変、あるいは支那事変とも呼ばれた。これが日中戦争の始まりであるが、確固とした戦略方針に基づく作戦計画ではなかったことがすでに証明されている。現地の軽率行動が故であり、中央が後から追認するかたちで戦争拡大となった。この後に、12月12日の南京占領と大虐殺事件が続いた。そして徐州会戦は、戦争拡大のための戦略が実行されるなかでの戦闘で、1938年5月19日に徐州を占領して終わる。時の権力者は、国内統一のために、人民戦線派学者グループの検挙(1938/2/1)、軍事費の予算化に35億円を計上し、総動員法(1938/4/1)の制定、米の配給制(1938/4/12)、メーデーの禁止(1938/4/12)などで戦争体制を整えた。

徐州会戦の記録である火野葦平『麦と兵隊』を取り上げる。この作品はこうした状況のなかで発売され、人気を博した。つまりこの作品は、戦勝ムードのなかで歓迎され、軍が公認した作品である。結果として軍の行動を側面から支える役割を果たしたと言える。この作品は1938年(昭和13)5月4日から5月22日までの19日間の日記形式の従軍記であり、物語らしいストーリーはない。作者

の目を通して描かれたものをいくつかに絞って見ていきたい。

2-1) 兵士たちのこと

まず、麦畑の中を進軍する様子と疲れた兵士たちの描写を見ておきたい。

出発。果てしもなく続く麦畑の中を進軍である。陽が上って来ると次第に暑くなって来る。雨が降れば泥濘と化する道は天気になると乾いて灰のようになる。黄色い土煙が濛々と立ちのぼり、煙の幕の中に進軍して行く部隊が影絵のようになっていたり、見えなくなったりする。……(略)……黄塵のため、口の中はざらざらする。歯にあたってがじがじ鳴る、吐くと黄色い唾が出る、汗が淋漓と流れ落ちる。軍服に沁みて透る。流れた汗に黄塵がくっつき、拭うと斑になってまるで、下手な田舎芝居の役者の白粉の剥げたみたいである。兵隊はものも云わず行軍して行く。話しかけても、怒ったような顔をして碌に返事もしない。小休止になると、埃の中だろうが、馬の糞の上だろうが、投げるように仰向けに引っくり返ってしまう。背囊には何日か分の米を入れた靴下を括つけてある。(5月9日)

この作品全体では、兵士たちの氏名は登場せず、将校のみの名が記されている。兵士たちのつらい行軍は、内地には想像もできず、その苦勞を目撃しながら、銃後の日本国民のおうようさや気楽さを非難している場面(5月5日)もある。この兵隊たちは、激しい戦闘の末、徐州を占領し、その後さらに進軍を続ける。つまり終りに近い場面であるが、いわば象徴的な描写であるので見ておきたい。

やがて東方に向かって前進し出した。石榴の丘から私は見て居た。一面のびょうびょうたる海のごとき麦畑の中を、遠く、右手の山の麓伝いに行く部隊もある。左の方も颯颯と続いて行く。中央も長蛇の列をなして行く。東方の新しき戦場に向かって、炎天に灼かれながら、黄塵に包まれながら、進軍して行くのである。私はその風景をたぐいなく美しいと感じた。私はその進軍にもり上って行く逞しい力を感じた。脈々と流れ溢れて行く力強い波を感じた。私は全く自分がその荘厳なる脈動の中に居ることを感じたのである。私はこの広漠たる淮北の平原に来て、このすさまじい麦畑に茫然とした。その土にこびりついた生命力の逞しさに駭いた。しかしながらそれは動かざる逞しさである。私は今その麦畑の上を確固たる足どりを以て踏み

しめ、颯颯と進軍して行く軍隊を眺め、その溢れ立ち、もり上り、殺到して行く生命力の逞しさに胸衝たれた。(5月19日)

ここでの描写は、麦畑の生命力と兵士たちの生命力を重ねあわせ、日本軍は無敵であるかのような印象を与え、しかも美しいとした。戦争初期の日本軍の破竹の勢いとも言える状態だったから、そして書き続けた作者火野葦平が軍部の報道班のスタッフであるがゆえの書き方、表現としてよいだろう。広大な麦畑に土煙をあげながら行進する軍隊をひとつの風景画のように描き出し、戦闘で疲れたはずの兵士たちの姿は描かれない。つまり遠景から見ての描写である。ひとつのまとまりとして、集団として兵士たちを描き出すことで日本の国力を示したということになるだろう。

2-2) 中国人の描き方

中国の農民たちのことを「土民」という表現をしていることを指摘しておきたい。「土民」という表現は「土人」という表現に通じる。戦前の漫画に「冒険ダン吉」というのがあったが、アフリカにいるダン吉は原住民たちの王で、常に王冠をかぶり、この原住民たちを「土人」と表現していた。ダン吉が子供であっても原住民たちの先頭に立ち、優位性を示す、つまり日本人の優位性を示すものとしての漫画だろう。この「土民」という表現にも日本人の優位性が現れているとしてもよいだろう。そして作者には、日本兵に対して「へらへら」笑う農民たちの態度が印象的であったようだ。これは随所に見られる。作者がより具体的に描き出したのは、日本の旗と五色旗を門に立てて開かれた「蚌阜附近郷村代表組合弁事処成立大会」での農民の姿である。

ここに集まった代表はことごとく、純粹の農夫ばかりと思われ、もとより教育などあろう筈はなく、身体つきは頑丈で、色は真黒に焦げ、顔は折り畳んだような深い皺で刻まれ、伝単を受け取る手は節だらけで八角金盤のように広く大きい。……(略)……私はこれらの朴訥にして土のごとき農夫に限りなき親しみを覚えた。それは、それらの支那人が私の知っている日本の百姓の誰彼によく似ていたせいでもあったかもしれない。これらの齒痒き愚昧の民族共は、彼等には如何

にしても理解できない一切の政治から、理論から、戦争からさんざんに打ちのめされ叩き壊されたごとくに見えながら、実際にはそれらの何もかも、彼等を如何ともすることの出来ないような、鈍重で執拗なる力に溢れている。(5月7日)

先に指摘した「土民」より以上に輪をかけた表現で、作者は「これらの歯痒き愚昧の民族共」と言う。このような表現が受け入れられることで当時の日本がいかに中国人を蔑視していたか理解できよう。作者はこのような表現をしながらも、理解不能な政治や戦争から痛めつけられている彼らに親しみを覚え、彼らの「執拗なる力」を密かに認めている。将校や他の兵士たちとは異なる視点、より深く見つめる作者の姿勢を窺うことができる。そしてこの姿勢は中国兵たちに対しても同様である。例えば戦闘の終わったところを通りかかって屍骸の胸のポケットから紙片を取り出して読んでみる。時計の保証書であり、さらに時を刻んで動いている懐中時計を見つけ「異様な感懐に衝たれ」、死骸のポケットに戻す。持ち主は死んでも時計が動いている。その状況に深く思いを寄せたのである。さらに手紙を持っていた捕虜にも敵対する行動をとることなく、その手紙を読んで捕虜の私生活に触れる。

広げてみると、その手紙は綿々たる思いを述べた恋文であった。「雷国東、我的親愛的哥哥、来手書十六号接得、心裏是娛樂的本意(らいこくとう、我が親愛なお兄様、お手紙は十六日につきました)」に始まって、「我為你肝腸想、我思為你結為夫婦、我為総想百年偕老(私はあなたを心から愛します。私はあなたと夫婦になりたい。私はどうしても百年の契りをしたい)」に致り、「情長紙短、千祈千祈回音、劉玉珍、上言(情は長く紙は短し、きつときつと返事を。りゅうぎょくちん、より)」を以て終って居る。この「短い紙に長い情」を託つ手紙を読む日本の兵隊を雷国東は極めて無表情な顔附で眺めて居る。(5月11日)

このエピソードに関する場面はこれで終りである。作者は手紙を読んだ感想やそれに付随する考えを直接に記すのではなく、手紙を読む日本兵とそれを見つめる中国兵を対比させて終える。暗黙のうちに読者に作者の考えを伝えるかのようだ。つまり日本兵は捕虜の個人的な手紙を読むことで

捕虜の私生活をわずかであるが知る。それを見つめる捕虜は手紙の文面を思い出しながら恋人のことを考える、と想像するのは筆者であるが、このような想像を許す書き方が作者の思いといえるだろう。むしろ作者のねらいはそれであろうし、捕虜に対する憎しみなどを読者に持たせないようにしているように思える。さらに別の場所では、四人の捕虜を見ながら言う。「私が、支那の兵隊や、土民を見て、変な気が起こる」としているが、その理由として、日本人に似ているからで、似てい過ぎるから困ると理由をあげ、同じ血を分けたアジア民族ということだけでなく、隣人のごとく思えるから「一寸厭な気持ち」だとしている。この気持ちをいつも味わいながらの参戦だったことを吐露している。

もうひとつの例を示しておきたい。この徐州会戦にまきこまれた農民が避難民となっている場所を通りかかった時である。近くの村の村長にお茶をすすめられた。

茶なんぞ出してサービスがよいではないかと云えば、いや、我々は日本人ばかりサービスする訳ではない、支那軍が来れば支那軍にもサービスするのだ、と云う。それでは両方来たらどうすると訊けば、逃げ出しますよ、と云って笑った。なるほど正直で食えない親爺だと思った。私は度々麦畑の逞しさに圧倒されたが、その麦畑の主人こそ農民たちなのであろう。

(5月20日)

事実、この農民たちは翌日には手製の日の丸の旗を持つことで日本兵の攻撃を避けた。畑での農作業や荷車、物売り、乳飲み子を抱えた女や子供たちがそれぞれ日の丸を手にしていて、日の丸を手にするか、荷物にくくりつけておくことで敵意がないこと、歓迎の気持ちを示す。これは生きるための知恵であり、したたかさである。

火野葦平は、これまで見てきたように、作品のなかで中国人の姿や行動を侮蔑的な語句を用いて表現をしながら、彼らに親しみを覚え、そして痛めつけられながらも、彼らはしたたかだとしている。戦闘の場面では中国人を、匿名性をおびた「敵」と表現するが、それ以外の場面では「敵」としての憎しみをもって描いてはいない。

2-3) 火野葦平の思い

中国軍の攻撃を受けて、作者自身が一時は死を覚悟する場面もある。それは5月16日の日付で最も長い記述となっている。敵の攻撃で前の晩から同じ場所にきぎ付けにされてしまい、いつもなら一日が終る時に書くのだが、この日の夕方、命があるかどうか判らぬとして、書き記したその一部が次の引用である。

生死の境に完全に投げ出されてしまった。死ぬ覚悟をして居る。今迄変に大胆であったように思えたことが根拠のないもののように動揺して居る。弾丸なんか当らぬと変な自信のようなものを持って居た。そんなことは気安めに過ぎない。迫撃砲弾はいくつも身辺に落下し炸裂する。その度に何人も犠牲者が出て、血の色を見せられる。

ただ、その砲弾が、私の頭上に直下して来ないという一つの偶然のみが、私に生命を与えて居る。貴重な生命がこんなにも無造作に傷つけられたということに対してはげしい憤怒の感情に捕われた。……(略)……我々の同胞をかくまで苦しめ、且つ私の生命を脅して居る支那兵に対し、はげしい憎悪に駆られた。私は兵隊とともに突入し、敵兵を私の手で撃ち、斬ってやりたいと思った。私は祖国という言葉が熱いもののように胸一ぱいに拡がって来るのを感じた。(5月16日)

これまで日本兵たちについては、戦闘場面や負傷者、行軍中の疲れた様子、食事時や休息中の陽気な雰囲気や好意の眼を持って描写してきた。その彼ら、同胞が目目の前の戦場で次々と敵の弾に当たって死んでゆくのを見ればこのような思いを持って当然であろう。ここに至るまで行軍中の苦楽を共にしていればなおさらである。まして、その間に家族や過去のことを互いに知り、親しみが深まっていれば撃った敵を憎んで当然だ。ここに戦闘時に生じる情につき動かされる行動がある。戦場での異常性を生み出す源がここにあると思える。戦闘未経験者であるから、推測でしかないが。

ところで、作者火野葦平は次に死について考えを展開する。状況はきぎ付けになった廟の中で集中砲火を浴びている場面である。負傷者の手当をしたりしながら援軍を待っていた。

私は死にたくないと思った。死にたくない。今此処で死にたくない。私は兵隊として戦闘して来た時に

は、死の中に何回も飛び込んで行った。私は軍人として決して卑怯であったとは思わない。むしろ、私は勇敢であったと信じて居る。しかし、私は今此処では死にたくない。しかし、死ぬかもしれない。……(略)……頭の中がじいんと鳴るようだ。私は掘りかけた穴の土に、父、母、と指で書いた。何度も消しては書いた。妻の名や子供の名を書いた。眼を瞑って、何かしら、何やかやを引くくめたようなものに向かって、どうぞお助け下さるように、と念じた。私は母の作ってくれたお守袋を握ってみた。私は日本に居る肉親の人達のまごころが自分を救ってくれるかも知れぬと思った。……(略)……穴を掘るのが面倒くさくなって、又廟の中に入った。砲弾が落ち、頭の上から土が落ちて来た。少し胸がどきどきする。私は観念はして居る。死にたくはないけれども仕方がないと思った。死んでも構わぬと思う。私は胸に手を当ててしっかりと心臓を押えた。恐怖でないとい自弁してみるが、恐怖に違いない。しかし私は努めて平静を装って居る。周囲には負傷した兵隊がものも云わず、眼をぎょろぎょろさせて居る。……(略)……妙な死に方をするなら拳銃でこめかみを打って死のう。私は拳銃をこめかみに当ててみた。冷たく、ひやりとした。私は死ぬときには、敵にも味方にも聞こえるような声で、大日本帝国万歳と叫ぼうと思った。しかし、生きたい、生きられるだけは生きたい、とそう思うと、又も故国のことが思われて、胸が一ぱいになり、涙が出そうになった。眼を瞑って祈る。砲弾は間断なく落下する。……(略)……一瞬の後には死ぬのかも知れない。七時。(5月17日)

この時点では、作者は軍の報道班員であって、戦闘員ではない。これより先、上海附近の杭州湾上陸の時点では、まだ報道班に配属されてはいなかった。芥川賞を受賞してからの配属で、上海にいたとき賞品の時計を持ってきた小林秀雄から受け取っている。上の引用文の中での「死の中に何回も飛び込んで行った」ときのことは、受賞を知る以前の杭州湾上陸の時点での戦闘である。おそらくは、戦闘のみを考え、この場面のようなかたちで死を直視してはいなかったろう。だからこの時点での「死にたくない」とする思いは、当初から戦闘員としての意識がなかったためかもしれない。この場面を読むときには、銃や砲弾の音、爆裂の音を耳に響かせる必要があるだろう。作者の心の揺れ方を再度確かめてみたい。「死にたい」と思いながら家族を考え、母の「お守袋」を握りながら、肉親の「まごころ」に救いを求める。とうてい起こり得ぬ奇跡を想定しながら。その次に

は「死んでも構わん」と恐怖を感じながら開き直り「平静を装って」周囲を見まわす。そして偶然の死よりも自分の意志で決行せんと拳銃をこめかみにあてる。だが「生きたい、生きられるだけは生きたい、とそう思うと、又も故国のことが思われて、胸が一ぱいになり、涙が出そうになった。」これが戦争での戦闘を強制された兵士たちの姿であろう。周囲には砲弾の炸裂する音が鳴り響いている。「一瞬の後には死ぬのかもしれない」と思いながら、なんとか偶然の死を、他者の力によってもたらされる死を拒否している姿がここにある。おそらくはこのような死を考えていれば、戦う人間ではないと糾弾されるだろう。そんな考え方は敗戦に導きだけだと。しかしこれが通常の人間の姿に違いない。多くの兵士たちは国の命令を受けての行動であるが故に、仕方なく状況を受け入れたのであろう。援軍を待つ姿勢の状態に置かれたときに生じた姿勢と考え方で、この作品は終わる。つまり、抗日の姿勢を貫く中国兵捕虜三人を処刑する場面である。

従って行ってみると、町外れの広い麦畑に出た。ここらは何処に行っても麦ばかりだ。前から準備してあったらしく、麦を刈り取って少し広場になったところに、横長い壕が掘ってあった。縛られた三人の支那兵はその壕の前にして坐らされた。後ろに廻った一人の曹長が軍刀を抜いた。掛け声と共に打ち下ろすと首は鞠のように飛び血が彫(ささら)のように噴き出して、次々に三人の支那兵は死んだ。

私は眼を反した。私は悪魔になっては居なかった。私はそれを知り深く安堵した。(5月22日)

この最後の二行は出版されるときには軍の命令によって削除されたと聞く。『人間の條件』の梶のように止めることはしなかったが、火野葦平はこの一行を戦後付け加えての出版によって自らを救ったと言えまいか。この戦争の矛盾をあからさまに書くことはできなかつたであろうが、火野葦平は「麦」の生命は「農民」であり、中国にあっては「中国人」とであると見なしていると思える。先に終わりに近い場面で、麦畑のなかでの進軍を引用したが、その描写に火野葦平の黙した考えが示されているように思える。麦畑に行く日本兵の長蛇の列を、麦畑の起伏に沿って進む姿を「その

溢れ立ち、もり上り、殺到して行く生命力の逞しき」と表現しているが、起伏そのものは大地であり、むしろ根付いているのは麦である。起伏をなぞり、通過するだけの兵士たちよりも、根付いている農民たちの方が生命力のたくましさがあるだろう。具体的に、中国の広大な大地での麦畑、そして行軍している兵士たちの隊列をイメージしてみる必要があるだろう。

こうして見てくると必ずしも火野葦平は戦争賛美者とは言いきれないと思える。むしろ巧妙に自身のメッセージを忍ばせている。勇壮な突撃のシーンもなく、英雄ともおぼしき兵を描かず、将校が新聞記者たちに兵士たちの地味な働き、特に常に前線にあって、つまり攻撃を受けながらも電話線を引く工兵の働きに注意を喚起していた場面を描く。火野葦平には、いたずらに戦勝ムードを煽り立てようとする姿勢はない。とすれば日本が負けることを予感していたかもしれない。昭和23年にはアメリカ占領軍の干渉で連載小説を中止させられたり、尾崎士郎や林房雄らと共に追放令を受けている。戦争責任をこの形でとらされたのである。戦後十五年後に火野葦平は自殺した。そのことが明らかにされたのは、さらに12年後の1972年(昭和47)である。

3. 学徒出陣と特攻隊

太平洋戦争の戦局について岩波講座『日本歴史21近代8』(1977)では次のように区分している。第1期を、1941年(昭和16)12月8日の開戦から1942年(昭和17)12月までとし、1942年(昭和17)8月7日の米軍のガタルカナル上陸以前を戦略的攻撃、それ以後を戦略的持久としている。第2期は1943年(昭和18)1月の日本軍のガナルカナル撤退から、1944年(昭和19)6月のマリアナ沖海戦までの時期で戦略的守勢の状態としている。第3期は1944年(昭和19)6月から1945年(昭和20)8月の敗戦までを絶望的抗戦の時期とした。

つまり、太平洋戦争の四十五カ月間(三年九カ月)のうち、初めの八カ月が戦略的攻撃、次の五カ月が戦略的持久、次の十八カ月(一年半)が戦略的守勢、残りの十四カ月(一年二カ月)が絶望的抗戦と歴史学者は区分けしたわけである。おそらく、あらゆる戦況、日本はむろんのこと関係す

る国々の戦争のための生産力、生活物資、各国の人心の傾向、戦意などを総合的にとらえた上での判断で区分け、命名されたのであろう。

学徒動員は1943年6月25日の閣議で決定された。上記の戦局わけに従うと「戦略的守勢」の時期である。すでに1942年4月には東京、名古屋、大阪に初の空襲があり、学徒動員を決めた1943年の6月には守勢の立場に立たされていた。この時点では兵員数は開戦時より約100万人多い337万人、つまり労働人口が削られ、軍需工場などでは操業に支障をきたす状態になっていた。そのために工場などに学徒が動員され、9月には学徒の徴兵猶予の中止、文系の学徒出陣となったのが1943年10月である。この学生たちが特別攻撃隊に組み込まれ、出撃するまでを描いたのが阿川弘之の『雲の墓標』である。

この作品は日記と手紙から成っている。昭和18年12月12日から昭和20年6月29日までの吉野次郎の日記が中心で、吉野の両親宛てと友人鹿島への遺書、それに昭和19年5月と昭和20年1月23日づけの藤倉晶による恩師宛ての二通の手紙、昭和19年10月5日づけで藤倉晶が友人鹿島芳彦に宛てた手紙、最後に生き残った鹿島芳彦が、吉野の両親に宛てた昭和20年10月づけの手紙が付け加えられている。

この作品に登場する具体的な場所であるが、まず海軍の基本的な訓練をする広島の大竹海兵団から始まる。予備学生はふるいわけされ、飛行科に進む者は茨城の土浦海軍航空隊に行くのだが、主人公たちは昭和19年2月20日から訓練が始まる。さらに攻撃機の機種によってそれぞれ違う場所に配属される。吉野と藤倉は鹿児島島の出水海軍航空隊に昭和19年6月3日から、その後大分の宇佐見海軍航空隊で昭和19年10月13日から飛行訓練を受け、この基地で藤倉晶は事故死する。吉野は茨城の百里原海軍航空隊に昭和20年5月21日から特別攻撃隊の訓練を経た後、昭和20年7月に千葉の木更津海軍航空隊に配属され、特別攻撃隊員として出撃し、米戦艦に突入した。

内容は、すでに記したように吉野次郎の日記が中心で、特攻隊員として出撃するまでの訓練、何故かと問うことを禁止される軍隊生活、学問への未練、事故、戦況などが綴られ、自己が置かれ

た状況をあまり抵抗なく受け止めて出撃する吉野の思いが書かれている。ところが藤倉晶の手紙が挿入されているので吉野とは違った考えを知ることができる。つまりこの戦争に懐疑的である藤倉の手紙を読むことで、読者は二人の運命に対する関心が高まる。この二人の考えの推移を見てゆきたい。

3-1) 吉野次郎の場合

吉野は体制順応型で無理なく特攻隊に組み込まれることを受け入れる。むろん抵抗はあるが、そんなに強いものではなく初期の頃は動揺がある。先ず日記の書き始めの部分から見よう。

自分の心は、積極的にすべてに打ち向かって行こうとして四肢にみなぎる勇気をおぼえて猛烈にふくれ上がるかと思うと、又、奈落へ突きおとされるような淋しさと焦燥とで、風船のように萎んでしまう。のこして来た学業への未練、父母への思慕、多くのなつかしい人々への気持、それが十重二十重に自分からみつき、自分を幾つにも引き裂くのである。しかし、自分たちにはもはや、なにかを選ぶということは出来ない。定められた運命の下に、自分を鍛えることだけが、われわれに残された道だ。(12月12日)

この思いは学徒出陣した学生たちにとっては皆同じであろう。戦局が日本にとって有利ではないことをおぼろげながらも知っているから、自分の死を覚悟した上での「運命」としたのである。そして客観的に自己の立場を捉えて、「自分たちの小さな心の動きをすべて圧伏する巨大な車輪の回転によって、一步一步大きな組織の中へ溶けこんでゆくのだ」と書きつけ、学んでいた万葉の世界を捨てて海軍軍人としての自分に徹することを決意する。決意しながらも揺れる思いは、土浦海軍航空隊に移ってからの雰囲気で考える内容が変わる。

われわれはここでは、何か事あるごとに、死ぬ死ぬと教えられている。いったい、戦争をやりとげることが目的なのか、ただ死んで祖国がすくえるものなら、われわれは何としてでも死んでみせるであろう。

(2月20日)

このように反発しながらもやはり状況を受け入れてしまう。「頭では死なねばならぬと考えながら、ここでは無意識裡に、生きてかえるのを当然のこととしているようだ(4月4日)」と反省し、「よくよく死への道を見さだめて、ここを戒めねばならぬ時」と決意を新たにす。そして自分の中で死を受け入れて、自分の生を位置づける。

大学で万葉集を勉強して来た一人の学徒が、弱いところになやみながらも、とにかく祖国のいしずえとなることを信じ、一生懸命な気持で死んでいったと見てもらえば、それで本望としよう。(4月11日)

われわれは負わされた大任を、かならず立派にはたしてみせる。戦局を悲観的にばかり、考える必要はない。(5月5日)

こうして決意を固めながらも、不利な戦局が伝えられるたびに、気持が掻き乱され、そんなとき「自分は自分たち若者の死生の道を、ほんとうにいまの時代に即して、責任をもってきびしく説いてくれる人の文章が読みた(6月28日)」いと日記に書きつける。

「海戦」という小説を読んでいたなら、「自分は、覚悟を個体としてさがして来た」という作者の告白があった。しかり。ながれるように自然にころのうちに充実してくるものこそ、ほんとうの覚悟なのだ。あらゆる矛盾を侵して、潮のように、自分のなかにもそれは満ちて来つつあると、いまよこびをもって自分はんじる。(10月3日)

やがてB29の空襲を受け、反撃もできず、さらには飛行訓練のための燃料がないことから飛行作業の中止が続き、フィリピンで初めて「神風特別攻撃隊」が登場したことを知る。そしてある少佐から特攻隊のことを詳しく聞く。一大尉の発案による肉弾攻撃が大本営で採用されつつあることを聞いたとき、吉野は自分が死ぬことを明確に意識した。

肉弾攻撃でもなんでもやる決意で、死ぬ覚悟はとっくに出来ていた筈なのに、そうおもうと、急に身体の中から何かもぎ取って行かれるような、ガクンとした

ものを感じた。妙にうつろな気持になり、思わず、「ふ〜む、ふ〜む」と声に出してうなり、つぎには、「畜生、どうにでもなれ、やっつけろ」とすばやくかんがえた。変なはなしである。覚悟が出来ているつもりで、やはり生きのこる気があったらしい。これでどうやら確実に来たとおもうと、今さらに一寸、夢を見ているような感じがする。(12月20日)

あと何日生きられるか分からぬが、死ぬことは確実に、遠い将来ではない。「もぎ取」られたのは吉野の生である。ついに特攻隊志願が募られ、心理的な強制で出撃を命じられる。その待機のため百里原航空隊に九州から移る。移動中に大阪の両親のところで一泊する吉野は、街で厭戦気分の様子に驚きながら嫌味の言葉に腹を立てる。自宅での様子は、「家はいい」とするぐらいで、詳しくは記されていない。出撃指名の十日ほど前に隊内には「似非風流」が流行し、吉野は関心をもち、6月14日と20日の日記では草花のことに触れ、花の名を書き連ねている。これはまるで、畑や野にある植物に眼を移して生をむさぼるかのようだ。

あたらしい特攻隊の編成あり。一番に指名さる。眼がさめたようなおもいだ。急遽木更津へうつる。いよいよ出撃らしい。

送別会をしてもらう。酒はない。歌を合唱して、酔った気分になる。明日ここを出る。行けばすべてがわかる。(6月29日)

このあとに吉野の遺書と生き残った鹿島の両親宛ての手紙が記されて終る。

3-2) 藤倉晶の場合

藤倉晶は反逆的で戦争に疑問をもちながら、飛行訓練を受け入れるのであるが、詳しく見ていきたい。吉野は、日記に藤倉は反逆的だと書き、要領よく立ち回ることを説いているから、この戦争について批判的傍観的な姿勢をとっていると記す。

俺はもともと戦争はきらいだが、とりわけこの戦争は、どこか根本的にまちがったものがあるような気がしてならぬ。……(略)……しかしとにかくもうおそい。俺にも近い将来に死が待っているかもしれない、それは仕方がない、だが、俺は貴様のようにあらゆる

努力を捧げたいなどとは、はじめから思っていないと。
(2月20日)

藤倉の決意を聞いて、口ほどに疑惑的ではなく、なやみ、苦しんでいると吉野は察する。だがその苦しみは吉野のそれとは違って軍隊に馴染むまいとする苦しみであった。友人たちが軍の大義名分や精神主義に追い詰められ、自覚が足りなかったことを反省し、鍛えねばとする心意気を持つようになったことを藤倉は恩師に手紙で報告する。合わせて軍隊に馴染まないための藤倉自身の考え方も恩師に伝える。つまり「この戦争はわれわれの祖国がわれわれに与えた大使命などおもいこまないでおくためには、そして、死ぬことによって祖国がすくわれるなどとおもわないためには、よほど十分にひねくれている必要がある。」藤倉はこの姿勢を貫いて隊内生活を過ごす。

そしてさらに死が待ち受ける運命、日本のことに考えを恩師に披露する。

敵をたおさねば自分が殺されるというのではなく、敵をたおしてもたおさなくても自分は抹殺されてしまう、自分が死ななければならぬというのではなく、友も自分も誰も彼も、すべて死ななくてはならぬという、そういう全面的なげしい状況が、こんご私たちの運命になるだろうと存じます。……(略)……この程度のことを考え、言い、書きとめることにこのような不自由と危険とおかさねばならぬ、そういう時代から、はたして新しいよき文明がうまれるものでしょうか。書き出した以上、はっきり申しあげますが、この戦争は日本の負けにおわるだろうと、私はこのごろある程度確信するようになってまいりました。

(藤倉晶の手記)

藤倉は、冷静に戦局と隊内の様々なできごと、上官の言動、自分の置かれた位置を見つめ、「戦争」という催眠術にかけられているとして、現在の生活、自分に課せられた運命に将来性を見出せずに暗澹としている状態を書いた。今さらここで藤倉の考えることを確かめる必要はないだろう。藤倉の生きた時代の体制は崩壊したのだから。「自由」がいかに新たな文明を導き出しているかは現代と当時を比較して見れば容易に理解できよう。ただし当時の時代状況を知らなければどうにもならないのだが。この手紙を土浦から出水への

移動のときに立ち寄り姫路の駅で面会する父親に託すことにしたのも兵士の手紙が検閲されるからで、当時の「不自由」のひとつの証拠である。

ところで吉野の日記に記述されている彼らの議論を簡単に見ておきたい。休日の外出のときの議論である。

(藤倉)「俺たちが立ちあがったら日本も盛りかえずぞだとか、立派に死んでみせるだとか、それは、ほんとうに貴様たちの、ぎりぎりの本音か？」

(藤倉)「貴様たちは、馬鹿な学者どもの便乗主義や神がかりを軽蔑しているけれども、貴様たち自信の頭が大分狂って来ていることには、すこしも気づいていない」

(吉野)「戦争などというものは、みんなが多少狂っていてこそやり遂げられるんだ。それで丁度いいんだ」

(藤倉)「自分の保身がはかれたら、一人一人で自分の生きのびる道を考えること。あわてないこと。ねばりづよく考えること。しかしどうしても駄目なら、われわれの自覚とはこりを最後までに捨てずに死ぬこと。俺のいう自覚は、貴様たちのとは意味が違う」

(6月11日)

もちろんこの会話の間には、吉野が知った藤倉の考えに対するコメントが記してある。たとえば「此の戦争自体の否定、乃至はすくなくとも戦局の前途に対する極端な悲観論」と決めつけている。また「日本をすくうために死なねばならぬなどとおもう必要はない」あるいは「われわれが死んでも、どうせ日本はもうろくなことにはならない」とする藤倉の考えを「かなりなげやりな考え方」と否定的な見方をしている。

おそらく、このような会話は学徒出陣した学生たちのなかで、至る所で議論されたに違いない。そして多くの学生たちは、明快な結論を出すことができずに、吉野のように運命を受け入れたのであろう。この議論で注目しておきたいこと、それは吉野が戦争は「多少狂っていてこそやり遂げられるんだ」と状況を正確に認識しながら、肯定し、受け入れての発言である。「狂って」いる状況を理解してはいるが、これに反発するか、しないかが藤倉との違いである。吉野をはじめとしてこの状況を受け入れざるを得なかったこと、それは今ふりに言うのなら、マインド・コントロール

である。

さて藤倉のその後はどうであったか。パイロットとしての訓練、攻撃の訓練を受けながらも、藤倉自身の考えに固執している状態にあった。大竹海兵団以後、臨時魚雷艇訓練所に配属された鹿島も反逆的であって藤倉と似たような考え方をしていたが、吉野宛ての手紙やはがきを見て、その変わり方を藤倉は知る。藤倉は鹿島宛の手紙でその変わりようを嘆き、本音かと問う。時代状況を冷静に見つめながら。

学者も詩人も、芋を食って笑って死ぬることは、繰返し繰返したうけれども、生きのこって日本を再建する方途は、誰からも聞くことが出来ない。誰がそれを本気で考えているだろう。このはげしいながれのなかに立って、世界のうごきを政治的に経済的に冷静に見つめるためには、万葉学はあまり都合のいい学問ではなかった。そういう自信も力もない、ただ俺は自己の肌身の感じてこの戦争を拒否するだけだ。……(略)……だが理屈はよそう。ただの臆病風というものに過ぎないかも知れぬ。俺はその臆病風を押しころさねばならぬ理由が見出せないだけだ。死にたくない。俺はこのいくさに命は投げ出したくない。鹿島よ、力をつくして生きのころうではないか。(藤倉の手紙)

この引用の文中での省略した部分には、学生時代に海軍の少将と左翼の活動家から日本の崩壊を予言され、それゆえに海軍と共産党に興味をもったこと、そして今となってはマルクスズムを少しは知っておけば、科学的な見通しができたのではないかと書き綴っている。つまり、藤倉はこの戦争と時代の見通しを見つめる目が欲しいとしているのであり、どちらかといえば感性で戦争を否定している自分により明快な論理性を求めているのである。そして訓練中の事故での犠牲者のことを語りながら、現時点での行動を事故を起こさずに生きのびることを鹿島に呼びかけている。

鹿島よ。毎日の訓練を最高の慎重さでくぐり抜けてゆこうではないか。死んで少尉の襟章などもらうまい。あと何ヶ月かはそれでやって行ける。だが、それから任官、実戦、出撃命令が出たら、そうするか？ 理屈も愚痴もすべてはなんの役にも立たなくなるだろう。そのときは、なんらかの非常の手段を取って、生きのこる途を講ずべきだと、俺は大分まえから思案しはじめている。その方法はまだ君にも言える段階では

ない。

(藤倉の手紙)

「方法」を藤倉は恩師宛ての二通めの手紙で明らかにする。この手紙は、恩師が藤倉のことを心配していることを友人のKからのたよりで知って、衝動的に書いたものである。恩師の心配する気持ちに感謝し、各地での日本軍の敗退を書き、燃料不足のため飛行訓練ができないことなどから敗戦は必死として敗戦後の日本を憂いながら「どうかしよう」としている決意を書き連ねる。そして特攻隊の訓練に入ったことを報告している。この志願の仕方にも「形式的には志願」で「心理的にはまったくの強制」であると実情を伝え、「生還ののぞみ」が「ゼロ」になったので「非常手段」をとる決意を伝えている。

その「非常手段」とは次のようなことである。事故を起こして負傷すること、だがこれは死ぬ確立が高い。敵地に不時着することでは、到着する前に打ち落とされる可能性が強い。途中の島に不時着することが最も良いとするが、このことを考えていると、風が心の中を吹き抜けるような思いになる。

私が辛うじて命をながらえ、釣などして暮しているとき、雲のうえを友人たちの特攻機が轟音をたてて南を指して飛び去ってゆく、そのあとの、途方もなくあかるい静かな、虚しい空の色が、私の眼にありありとうかぶのでございます。自分のおこなわんとすることが卑怯なことであるため、良心のとがめを受けているというのともすこしちがうらしく、寂寞への恐怖ともすこしちがうらしいのです。無意味な死を避けるつもりでいながら、その空の色をおもうと、生きることも物憂くなるという風な、この妙な、力の抜けてしまうような空虚さは、まことに始末のわるいもので、私はなんとかして、これを早く退治してしまわねばとおもっております。……(略)……戦争を肯定し得ず、友人を見殺しにしても、皆と別の道を選ぼうとするときに、この意識はなかなか苦しいものでございます。しかし先生、私はこの妙な空虚なものにも耐え、多くの人の無言の非難があるならそれにも耐え、なんとかやってみるつもりです。(藤倉の手紙)

この「空虚なもの」とは「生きる目的の欠如」が故に生じていることに他ならない。友人たちが戦争に勝つことを目的にして、捨身の肉弾戦を敢

行しようとするために、今をそれなりに充実させているかも知れない。運命とあきらめながら。そして「死」より向うのことを考えていないのが友人たちである。藤倉にとっては、現時点での目標は生き永らえることであり、敗戦後の日本のことを考えているにしても、生き延びた後の自身の「生きる意味を」見出していない。未来への展望を生み出すような教育がなされず、それを考えさせるような状況ではなかったから、見出すことは不可能としても言い過ぎではないだろう。戦争に勝つことばかりを強調し、目的とすることでそれ以外に眼を向けようとはせず、つまり視野が狭く、藤倉の言う科学的に冷静に見つめることとはほど遠い状態である。それにしても藤倉のような若者たちも多かったにちがいない。

このあと藤倉は出撃せず、訓練飛行のとき着陸の失敗で事故で即死してしまう。

3-3) 若者たち

まず運命を運命として受け入れる若者、彼は死を目前にした運命、その中であって自らの生きる意味を必死になって見いだそうとしている。そして、その運命に身を預けて、精一杯生きようとする姿でもある。しかしこれはややもすれば美化される可能性がある。たとえば神風特攻隊を描いた映画などでは「お国のためにいさぎよし」とする姿が強調される。

この自らの生きる意味を必死になって見いだそうとし、精一杯生きようとする若者たち、実はこれが大多数の若者である。現代においても同様としてよい。

そして藤倉のようなタイプ、運命に抵抗する若者であるが、この作品に登場する藤倉は、感覚的に戦争を否定しようとしている。彼が、死を目前にした運命に意味を見出せないとするのは、常に自らの生に充実感を求めていたと言えよう。つまり、軍隊という限られた空間と限られた時間のなかで、感覚的に戦争を否定する人間、いわば敏感な人間にとって生の充実を求めることは不可能である。「自分の人生はこんなはずではない」という思いがあったはずだ。だから、生きのびることを決意したのである。

この時代を代表する二人の若者は、実は現代の

みならず、いつの時代にも言えることであるが、それぞれの自分の位置を明確に見出していない若者たちの姿である。若者たちは、自分がどのような位置にいるか、つまりその時点で、どのような社会にあって、どのような国際状況にあって、どのような政治が行われていて、そしてどのような展望をもって自分が生きてゆくかを考え、実践することが不可能であったのだ。藤倉が科学的にもごとを認識したいとする思い、生き延びてから先の人生には「空虚」があるかもしれぬとするのは、まさしく自己の位置、さらに未来の自分の生き方の根本姿勢が見出せていない状態である。確かに情勢や戦局が一方的に伝えられるだけであり、個人にしてみればはるかに巨大な権力が時代を支配していた。それゆえに状況認識は不可能であった。そしてこの若者たちに約束されていいはずの未来の生活は、無残にも戦争が奪っている。

このように考えてみると、死を前にした特攻隊員の「お国のために」とする精一杯の気持を美化し、これに続けとすることは過ちである。むしろ文学的テーマとするのが相応しい。この時代であって運命を受け入れ、あるいは反抗し、生と死に直面した若者を描くことで、いつの時代にもいる生きることの意味を求めて苦しむ若き人間を描いたのである。そしてこのような状況に追込む時代という怪物、人間の殺しあいに過ぎない愚かな戦争の告発がこの作品の主題である。この点をとらえておかないと誤解が生じ、作者阿川弘之を戦争賛美者のごとくとらえてしまうことになる。

4. 敗戦下の敗残兵

大岡昇平の『野火』に描かれたものを見る。大岡昇平が召集されたのは1944年(昭和19)3月で三十四歳の時で、フィリピンへ送られたのが翌年7月で戦況は先の区分によれば、第3期(1944年6月から1945年8月の敗戦まで)の絶望的抗戦の時期である。12月には米軍がミンドロ島に上陸したため、山中に逃げ込み、捕虜となったのが翌年の1月である。フィリピンを離れたのが、終戦の年の11月で帰国後「俘虜記」を書き上げたのがさらにその翌年、昭和21年の5月で、6月には「狂人日記」(『野火』の原題)を書き始める。この作品が世に出るためにはさらに5年が必要だった。

つまり1951年(昭和26)の1月号の「展望」に連載が始った。

作品構成は1から39の章に分けられ、各章には小題が付けられている。過去を振り返る独白となっているが、37章の「狂人日記」の部分で精神病院で手記を書いていることが明らかになる。物語が展開される場所はフィリピンのある島で作品内では「比島」となっている。

田村一等兵が敗残兵となってから復員するまでのできごとが描かれ、田村が結核で野戦病院に入っていたが、もとの部隊に追い返されて戻って来たところから始る。だが、もとの部隊も受け入れず、わずかな糧秣を持たされて病院に追い返される。そして所属するところがなく戦闘、交戦に加わらず、彷徨する。この間の出来事で注目すべき点は、生と死、そして人肉を食べることである。極限状態に人間を置くことで生の意味を問うている。内容にそって見ていきたい。

4-1) 死も選択のひとつ

先ず次の引用を見てほしい。部隊から追い返されて病院へ行く道での思いである。

奇怪な観念がすぎた。この道は私が生れて初めて通る道であるにも拘らず、私は二度と通らないであろう、という観念である。私は立ち止り、見廻した。(略)

比島の林中の小径を再び通らないのが奇怪と感じられたのも、やはりこの時私が死を予感していたためであろう。……(略)……

してみれば我々の所謂生命観とは、今行方とて無限に繰り返し得る予感にあるのではなからうか。

(二 道)

このような思いで、周囲を見渡す。

比島の熱帯の風物は私の感覚を快く揺った。……(略)……すべて私の心を恍惚に近い歓喜の状態においた。こうして自然の中で絶えず増大して行く快感は、私の死が近づいた確実なしるしであると思われた。

私は死の前にこうして生の氾濫を見せてくれた偶然に感謝した。(同)

この思いは、死を意識し、予期したからに他ならない。死が眼の前になければ自然をこうは見ないし、感謝するほどにはならない。事実、田村は

歩兵の視点から見て、考える。「眼の前に現われる自然の雑多な様相は、彼にとって、元来無意味なものである」とし、意味あるとすれば、敵兵から身を守る遮蔽物であり、それがなければ狙撃されてしまう危険がある。その意味では自然は意味がある。ところが自然がただそこにあり、兵士自らも一つのものとして生きて存在している。この両者の間になら関係がなければ、そして兵士が、自然を意味ある存在としての生と捉えず、さらに死と対置して意識しない限り、上に引用したような思いは持たない。だから自然を感謝することなく、無関心でありながら平然と生きている。田村はこのことを「この無意味さが彼(兵士のこと)の存在の支えであり、勇気の源泉である」とした。つまり死を意識していないから。

さて場面は変って、入ることのできなかつた病院は米軍の砲撃で燃えつき、日本兵はそれぞれ山の中に逃げ込んだ。田村は小さな川のほとりに出て、死を見つめた。

糧食はとうに尽きていたが、私が飢えていたかどうかはわからなかった。いつも先に死がいた。肉体の中で、後頭部だけが、上ずったように目醒めていた。死ぬまでの時間を思うままに過ごすことが出来るという、無意味の自由だけが私の所有であった。携行した一個の手榴弾により、死もまた私の自由な選択の範囲に入っていたが、私はただその時を延長していた。

(八 川)

この時点では投降することを一切考えていなかった田村は、死までの時間を自分の裁量の中にあると考えた。そして川のほとりで手榴弾での爆死を想定するまでになる。自分の肉体が様々な元素に分解することを思い、自分の意識のことを考える。

私は吐息した。死ねば私の意識はたしかに無となるに違いないが、肉体はこの宇宙という大物質に溶け込んで、存在するのを止めないだろう。私はいつまでも生きるであろう。

私にこういう幻想を与えたのは、たしかにこの水が動いているからであった。(同)

これが近代科学を学んだ、つまり魂の存在をあり得ぬとした人、無神論者の考えであろう。むろ

んこのように考える限り、自らの意識が死後どうなるかは想定できない。にもかかわらず、死の恐怖を田村は覚えない。『麦と兵隊』で従軍した作者、『雲の墓標』の吉野たちのように死を恐怖した意識はここには描かれない。死が身近でありながら、死を突き放して見ているのがこの田村一等兵の特徴である。田村は、死ぬのは今と思うのだが、「自分の行為を選ぶ力」が残っているのなら、できることをしようと考え、「生きる執着」を自己の中に見出す。現地人の山小屋を見つけ、食料も手に入る。

4-2) キリスト教教会

戦闘の音は遠のき、この山小屋で何日かを過ごした後、海岸に十字架が見えた。田村は「戦慄」し、「宗教的象徴の突然の出現は、肉体的に近い衝撃を与えた」。少年時代にキリスト教に接近したことがあるからである。その接近の理由は「性的習慣を自己の意志によって抑制できなかったから」であった。別な言い方をすれば、肉体が求める快楽を自己の意志のもとに置くことができないためにその抑制力を神に求めたのである。その夜、村の教会で埋葬のミサが行われ、死体が自分であるという夢を見た。棺の中にある自分が「デプロフィンデス(われ深き淵より汝を呼べり)」といった。これを啓示と受け止め、翌朝、教会のある集落に入る。無人状態であった。教会の前には日本兵の屍体ごろがっていた。掠奪に現われた日本兵が報復されたのである。しかし村人はいない。

教会の前の日本兵の屍体と教会内部のキリスト像、それは自分の運命を呪うかのごとくで、そして思いを定めた。

比島のみすぼらしい会堂の内部には、何も私の呼声に答えるものはなかった。「われ山にむかひて目をあぐ、わが助けはいづこより来るや」

この時私は私自身と外界との関係が、きっぱりと断ち切られたのを意識した。地上で私の救いを呼ぶ声に応えるものは何もない。それは諦めねばならぬ、と思い定めた。(十八 デ・プロフィンデス)

自分の力ではどうにもならぬ運命の改変を、宗教に救われるつもりで来たところがこのように諦

めることになってしまった。そして荒された教会の司祭館に入って眠った。その夜、若い男女が小舟で来て、司祭館に入って来た。彼らにマッチが欲しいと田村はねだるが、女が悲鳴をあげたのでうち殺してしまう。後悔し、悲しんで銃を川に投げ込み、山に逃げ込む。

宗教が個人にとってどうにもならぬ運命から自己を救うことは不可能である。田村の置かれた状況は、ごく普通の人間の営む日常生活ではない。兵士に要求される戦いの場は失われ、戦うにしても殺されることは必至で、戦うためのエネルギー源たる食料もない。したがって生への展望はとうていあり得ない。生きる意味をこのような状況にあって宗教に求めるのは間違いであった。まして現実的なつらさを打開することなど求めても無駄である。

4-3) 見られていること

この後、病院の近くで知りあった永松と安田に出会い、島の北東部のパロンボンに共に向かう。途中で彼らとはぐれ、米軍のトラックが行き交う道路によって行く道をふさがれる。闇に乗じて沼地を通過して、横断しようとする時の状態が次の引用である。途中で死んでもいいと思って気楽になった状態である。

この安易な感覚に伴って、一つの奇妙な感覚が生れて来た。私は自分の動作が、誰かに見られていると思った。私は立ち止った。しかし音もない泥濘の中で、私を見ている者がいるはずはなかった。私はすぐ自分の錯覚を噛み、再び前進に戻った。

しかし私は間違っていた。私を見ていた者はやはりいたのである。証拠は、見られているという感覚を否定してからは、私の動作は任意、つまり自由の感じを失い、早くなったことである。(二十五 光)

この後他の日本兵が米軍に発見され、攻撃を受けるのを見て、横断をあきらめた田村は戻る。茂みに隠れながら田村が考えたのは、「投降」であった。それを決行しようとする現地人の女ゲリラ兵が現われ、米軍兵士と談笑する。その女兵士を見て、射殺した現地人の女に似ていると思い、「投降」を断念する。

そうだ、私はたとえ助かっても、私にはあの世界で生きることは、禁じられているはずであった。

任意の状況も行為も私には禁じられていた。私自身の任意の行為によって、一つの生命の生きる必然を奪った私にとって、今後私の生活はすべて必然の上に立たねばならないはずであった。そして私にとって、その必然とは死へ向っての生活でなければならなかった。

(二十六 出現)

つまり、ゲリラの女兵士を見て、自らが殺人者であることを再認識し、自分を見ていたのは射殺した女とみなした。しかし、この章の最後の部分では、女とすることは間違いであったとしている。

ジャングルの中をさまよいながら、草や虫、蛭を食べて生き延びた。やがて、日本兵の屍体の臀部がそぎ取られているのに気がつき、人肉を食べた話しを思い出す。自分がそれを実行することを躊躇した。

新しい屍体を見出す毎に私はあたりを見廻した。私は再び誰かに見られていると思った。……(略)……

私の眼は、人間ならば、動かぬ人間を探していた。新しい、まだ人間の形態を止めている屍体を。

(二十八 飢者と狂者)

そして四十歳を超えたと思える将校に出会う。この将校はいくらか精神に異常をきたしており、しきりに飛行機が迎えに来てくれることを願っていた。この将校が死ぬ直前に右手の上膊部を左手で叩いて、田村に言う。「俺が死んだら、ここを食べてもいいよ」と。将校の息が絶えてから、彼はこれを実行しようとする。将校の上膊部をめくると十字架のキリストの腕を思い出す。躊躇しながら、小動物たちが屍体をむさぼるのを見ていた。物体と魂は違うとし、しかも魂が「ここを食べてもいいよ」といったこと、田村自身が殺した人間ではないと、納得させ、銃剣で切ろうとした。

私は誰も見ていないことを、もう一度確かめた。

その時変なことが起った。剣を持った私の右の手首を、左の手が握ったのである。この奇妙な運動は、以来私の左手の習慣と化している。……(略)……

私が生れてから三十年以上、日々の仕事を受け持ってきた右手は、皮膚も厚く関節も太いが、甘やかされ、怠けた左手は、長くしなやかで、美しい。左手は私に

肉体の中で、私の最も自負している部分である。……(略)……

この変な姿勢を、私はまた誰かに見られていると思った。その眼が去るまで、この姿勢をこわしてはならないと思った。

「汝の右手のなすことを、左手をして知らしむる勿れ」……(略)……

村の会堂で私を呼んだ、あの上ずった巨大な声である。

「起てよ、いざ起て……」と声は歌った。私は起ち上がった。これが私が他者により、動かされ出した初めである。

(二十九 手)

屍体から離れることで左手は右手から離れた。田村は雨があがった後の森の中を歩きながら、「万物が私を見ている」と思い、「彼等に見られているのがうれしい」とする。そして名も知らぬ熱帯の花に話しかけられる。

「わたし、食べてもいいわよ」

と突然その花がいった。私は飢えを意識した。その時再び私の右手と左手が別々に動いた。

手だけでなく、右半身と左半身の全体が、別もののように感じられた。飢えているのは、たしかに私の右手を含む右半身であった。

私の左半身は理解した。私はこれまで反省なく、草や木や動物を食べていたが、それ等は実は、死んだ人間よりも、食べてはいけなかったのである。生きているからである。……(略)……

空からも花が降って来た。……(略)……

「野の百合は如何にして、育つかを思へ、勞せず紡がざるなり。今日ありて明日畑に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ」

声はその花の上に漏斗状に立った、花に満たされた空間から来ると思われた。ではこれが神であった。……(略)……

私は祈ろうとしたが、祈りは口を突いて出なかった。私の体が二つの半身に別れていたからである。私の身が変らなければならなかった。

(三十 野の百合)

「見ているもの」はこの時点では「神」としてよいかもしれぬ。ここに宗教の役割がある。田村の場合、殺人者と認識したがために自分の行動、まずは「投降」を断念した。そして次の行動、死体の肉、人肉を食べる行動は左手が押さえた。そして花との対話、これらのことから生きることは

他の生物の生命を奪うことだと認識する。生命の維持の根源的な意味を深く知ったのである。つまり「生き方」の問題である。右手の行動を容易に実行してはならない。とすれば左手の動きは、およそ生命維持のための行動、いわば動物的で人間的ではない行動を押さえる。「神」であれ、人間の誰であれ、「見られている」ことを意識すれば、人は自らの行動を抑制する。より人間らしい行動をすることは、なにも「見られている」ことを意識せずとも可能だ。田村が告白するように「身が変わらなければならない」として、その生き方を身につければよい。

4-4) 「人肉」と生還

飢えて瀕死の状態にあって、田村は思う。神に愛されているのなら、なぜこのような状態にあるのか。飢えてもうろうとしながら彼の目の前にころがっている人間の足を認めた。それは腐ってはいなかった。這い、転がりながら近づく途中でまたしても見られていることを意識し、見つめる二つの眼と銃口を確認した。はぐれたはずの永松であった。この永松に水を与えられ、猿の肉を口に押し込まれた。

肉はうまかった。その固さを、自分ながら弱くなったのに驚く歯でしがみながら、何かが私に加わり、同時に別の何かが失われて行くようであった。私の左右の半身は、飽満して合わさった。(三十三 肉)

こうして田村は、永松に支えられながら、もう一人の知り合いの安田のところに連れて行かれる。永松は、うまく歩けない安田のために行動を共にしていた。しかも安田は煙草の葉を餌にして永松の行動を思いのままにしていたのである。永松が猿を追っている間に、安田に言いくるめられ、永松に内緒にしておけと言われていた手榴弾を巻き上げられてしまう。その後銃声が聞こえたので田村はその方向に行くと思えば日本兵が逃げ去るのを目撃する。永松が「猿」を追っていたのである。切り刻まれた屍体を見つけてそばに行く。

私がそれを見て、何か衝撃を受けたと書けば、誇張になる。人間はどんな異常の状況でも、受け容れることが出来るものである。……(略)……

私の運の導くところに、これがあったことを、私はすこしも驚かなかった。これと一緒に生きて行くことを、私は少しも怖れなかった。神がいた。

ただ私の体が変わらなければならなかった。

(三十五 猿)

田村はすでに予期していたわけである。自分が人肉を食べていたことを。永松にもそれを伝えた。その意味では田村は共犯者であり、同罪と覚悟していた。事実、永松が「猿を逃がした」というと田村は「残念だった」と言う。ただ永松と違っていたのは田村が直接手を下してはいない点だった。田村が手榴弾と安田のことを話すと、手榴弾を手にいれた以上、安田が自分たちを襲うと永松は言い、逆に計略をはかって手榴弾を使わせた。手榴弾の破裂で田村は肩の肉がそがれた。田村は、その自分の肉を急いで食べてしまう。自分の肉だからという理由でなんの躊躇もなかった。安田との諍いは続き、湧き水のある場所で待ち伏せをしていたところへ、三日めに安田が来る。安田が詫びをいれるが、永松は射殺し、飛出して行って、刀で手首と足首を切り落とした。

怖しいのは、すべてこれ等の細目を、私が予期していたことであった。

まだあたたかい桜色の肉を前に、私はただ吐いていた。空の胃から黄色い液だけが出た。

もしこの時既に、神が私の体を変えていたのであれば、神に栄えあれ。

私は怒りを感じた。もし人間がその飢えの果てに、互いに喰い合うのが必然であるならば、この世は神の怒りの跡にすぎない。

そしてもし、この時、私が吐き怒ることが出来るとすれば、私はもう人間ではない。天使である。私は神の怒りを代行しなければならぬ。

(三十六 転身の頸)

永松と争って銃を奪い、田村は銃口を握った永松を射殺する。そして記憶は途切れる。この後の手記は三十七章に入って、東京郊外の精神病院の一室で書いていることを記している。米軍の衛生兵からゲリラに捕まったときに後頭部に傷を受けたことを聞いたこと、記憶喪失があると診断されたこと、結核のため病院船で復員したこと、妻に喜んで迎えられたこと、食事の前の手の習慣から

狂人とされ、入院し、離婚したことが記され、なるべくしてなったと言うよりも、この来るべきところへ早く気がつけばよかったと書いている。

不本意ながらこの世へ帰って来て以来、私の生活はすべて任意のものとなった。戦争へ行くまで、私の生活は個人的必要によって、少なくとも私にとっては必要であった。それが一度戦場で権力の恣意に曝されて以来、すべてが偶然となった。生還も偶然であった。その結果たる現在の私の生活もみな偶然である。(略)……

しかし人間は偶然を容認することは出来ないらしい。偶然の系列、つまり永遠に堪えるほど我々の精神は強くない。出生の偶然と死の偶然の間にはさまれた我々の生活の間に、我々は意志と自称するものによって生じた少数の事件を教え、その結果我々の裡に生じた一貫のものを、性格とかわが生涯とか呼んで自ら慰めている。ほかに考えようがないからだ。(略)……

もし私の現在の偶然を必然と変える術ありとすれば、それはあの権力のために偶然を強制された生活と、現在の生活とを繋げることであろう。だから私はこの手記を書いているのである。

(三十七 狂人日記)

我々、人間の生は、この田村が記すように、実はすべて偶然である。しかし、その生をすべて偶然とするのではあまりに寂しい。だから人間は自らの生に意味ありとするために、つまり必然とするために意味を見出そうとし、ひらたく言うのなら、「生きがい」を見出そうとしている。上の引用にもあるように田村が日記を書くことで、兵士としての、そして敗残兵としての生と復員してからの精神病院での生を繋ごうとして、その必然を見出そうとしている。この日記に現われていない、軍に入ってからのこと、戦闘中のことは、戦うことを強制されたがための必然であり、敗残兵となってからのことは、無神論者から見ればあきらかに偶然である。

次の三十八章の「再び野火に」では、忘却の灰色の部分が野火の映像で占められていると記され、さらに最終章の「死者の書」では永松を射殺してからの以後のことが思い出されて書かれている。野火の下に人がいると確信して山を下り、人間を求めて、人影を見ると永松を打った銃を発射した。だが多くの人影が近づくと見て、左手で

銃を掲げたとき、後頭部を殴られたのである。これらを必然と考えたのである。つまり最後の部分であるが、次のようなことが書かれている。

もし私が私の傲慢によって、罪に墮ちようとした丁度その時、あの不明の襲撃者によって、私の後頭部が打たれたのであるならば——

もし神が私を愛したため、予めその打撃を用意し給うたならば——

もし打ったのが、あの夕陽の見える丘で、飢えた私に自分の肉を薦めた巨人であるならば——

もし、彼がキリストの変身であるならば——

もし彼が真に、私一人のために、この比島の山野まで遣わされたのであるならば——

神に栄えあれ。(三十九 死者の書)

この部分は田村が病院で死んでからの記述とされている。この引用の少し前に次のように書かれている部分がある。死後の世界で殺した女と永松、内田が近づいてきて田村を笑った。

彼等が笑っているのは、私が彼等を食べなかったからである。殺しはしたけれど、食べなかった。殺したのは、戦争とか神とか偶然とか、私以外の力の結果であるが、たしかに私の意志では食べなかった。だから私はこうして彼等と共に、この死者の国で黒い太陽を見ることが出来るのである。

しかし銃を持った墮天使であった前の世の私は、人間共を懲すつもりで、実は彼等を食べたかったのかも知れなかった。野火を見れば、必ずそこに人間を探しに行った。私の秘密の願望は、そこにあったかも知れなかった。(三十九 死者の書)

この後に先の引用「もし私が……」の部分が続いてこの手記は終る。ここでは、地獄とも天国ともつかず、暗い空に黒い太陽が輝く死者の国での場面である。生命を奪うこと、つまり殺人をすることは自分の意志ではなく、他者の力とした。つまり責任は負わない。「食べない」ことだけを自分の意志として強調し、これまでの生のなかで、これだけにすがって生きて来たといえよう。永松を殺したことは自分を天使として、「神の怒り」を代行したのであり、「人間共を懲すつもり」で野火の中の人影に向かって発砲した。

だが、自分の中に「人肉」を食べたいとする「秘密の絶望」があったとすれば、敗残兵となってか

らの偶然のできごとを最後の部分のような「もし……」で始まる文章から見て分るように「神の意志」として受け止めることができよう。実際、大岡昇平の記述する描写に、たとえば先に引用した右手と左手のことであるが、左手は良心、右手は悪の心の手先であるとする事ができる。そして「三十 野の百合」の一部を引用したが、ここでは明確に自分自身が二つに分れている。つまり悪と善の間で揺れているのである。このような状態の時に「肉」を口にした。そのとたん「何かは私に加わり、同時に別の何かは失われて行くようであった。私の左右の半身は、飽満して合わさった」。この部分でキリストが最後の晩餐で自分の血を葡萄酒とし、肉をパンとして弟子たちに分け与えた場面が想起される。この場合、「人肉」を食べることが、神の助けであり、再度生を与えられたとすれば、「何か」は神の意志であり、「別の何か」は右手の獣性の部分といえよう。以後、常に神を意識し、田村は「神がいた」がゆえに、恐れず、永松の安田に対する行為に怒りを覚えたのである。

しかし、ここでキリスト教という宗教から離れて考えてみたい。様々な境遇に人間を放り込む神の意志を、運命あるいは宿命とすれば、すべて我々の人生、行動は運命という流れの中での必然である。これを人間として誕生した時点から偶然としたらどうなるか。田村のように引き金を引いたことは自分であることに変わりはないのに、「食べない意志」のみを強調する姿勢に繋がりはしないか。カミュの「殺人は太陽のせいだ」とする小説『異邦人』を思い出させる。人間が生死の境目となる極限状態に置かれたとき、田村のような考え方をすることは、人間の社会に戻って来ても、生きられず、精神病院に入るほかない。

大岡昇平が最後の部分を「もし私が……」で終わる文章で結んだのは、種々の偶然は神の救いとしたかもしれない。だが、戦争は人間の力でどうにかなるかもしれぬという視点が落ちていと指摘はできる。しかし、この点については、うまく書込まないと陳腐になってしまうことは明らかだ。

5. 軍隊という組織

野間宏は『真空地帯』を1952年(昭和27)に書き下ろして発表した。この作品は同じ年の11月に毎日出版文化賞を受賞している。

作品の構成は、第一章が一から十二、第二章が一から十、第三章が一から十二で六の部分が1から8となっており、主人公木谷の「犯罪」経過が描かれている。第四章は一から五、第五章が一から十、第六章が一から十六、第七章が一から十一で四の部分の1から2が事件の経過を別な人間の視点、つまり木谷の復讐相手が語る内容が描かれる。場所は大阪にある陸軍第4師団の8連聯か37連聯の駐屯地と思われる。内容は木谷上等兵が陸軍刑務所から出所して連隊に戻り、南方へ送られるまでのことが描かれている。ストーリーの中心は、木谷の復讐しようとする思いと軍法会議で木谷が有罪となった過程を曾田一等兵が知る経過となっている。経理担当の将校が私腹を肥していることを明るみに出さないために木谷はその犠牲となった。ストーリーの展開のなかで軍部内の初年兵いじめや無理強いが描かれている。

5-1) 軍組織の人間たち

日本軍の組織は最上に大元帥として天皇があり、以下に大将、中将、少将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、准尉、曹長、軍曹、伍長、兵長、上等兵、一等兵、二等兵となっており、海軍も同じである。軍隊の目的とは、戦闘、戦争に勝つこと、敵の兵士を殺すこと、敵の戦闘能力、戦力に損害を与えることであって、そのために持っている戦闘能力をあますことなく発揮するために、行動しなければならない。階級を明確にしておくことでこの行動は可能であり、つまり縦の秩序を保ち、行動することで目的を達成することができる。

そして日本軍の場合は、天皇の軍隊であったことが様々な悲劇を生んだと思える。明治15年に出版された「軍人勅諭」の冒頭には「我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある……」とあり、このために「皇軍」とも言っていた。中国人は「蝗軍」と呼んでいたとも聞く。何でも喰いつくすイナゴにたとえられたのであるが、当時の日本軍の

行状をからすれば、このたとえはむべなるかなと思ふ。

この作品では夕食前に初年兵が「ひとつ軍人は忠節をつくすを本分とすべし……」と「軍人勅諭」を唱和している。このようなことから「上官の命令は天皇の命令と同じ」で絶対とされたのである。だから上位階級の言うことに下位階級の者は従わなければならない。それが戦闘時の「生」か「死」かの時であるのなら、つまり敵を殲滅するためなら、また訓練時ならこの上意下達は理解できよう。だがそれ以外の場所でもこの「精神」は生きている。無理強いである。海軍には「精神注入棒」なるものがあつたと聞く。敵を倒す、つまり殺人のための訓練を日常的な場でその「精神」を造り変える。そのために日本軍の内部でここに非人間的な扱いが登場する。

この作品では、その絶対的な地位を利用して私腹を肥す将校たちが登場する。彼らの対立の間になつた木谷が利用されて、それらがもみ消されてしまう。多少とも反抗した木谷は、無念に思いながら、南方の戦線に送られる場面で作品は終わる。

不合理で非合理的なことが社会と隔絶されたところで行われていた。これを野間宏は真空地帯とした。

5-2) 野間宏の告発したいこと

この作品に描かれた種々のエピソードをここで詳細に見ても大きな意味はないだろう。野間宏は、1938年（昭和13）に京都大学仏文学科を卒業後、大阪市役所に勤務した。社会部福利課に配属され、被差別部落の実態を知り、部落解放の運動家たちから多くの刺激を受けている。つまり野間宏の社会に対する問題意識は部落差別から出発している。

1941年（昭和16）11月に教育召集を受け、第37連隊歩兵砲中隊に補充兵として軍隊入りした。翌年の1月に中国の華北、2月にフィリピンへ行き、パターン、コレヒドール戦に加わるが、5月にはマラリアにかかり入院、10月には帰国して原隊に復帰する。1943年（昭和18）には治安維持法違反で逮捕され、懲役10年執行猶予5年を宣告され、12月に大阪陸軍刑務所を出て原隊に戻る。翌

年11月には部隊の南方移動が決まるが監視上の問題で召集解除となる。

戦後は共産党員として文筆活動をしており、この作品もその中の一つで1952年（昭和27）に世に発表した。いかに日本軍の内部がひどいものであつたかを暴露し、日本軍が減ぶべくして減んだとした作品である。人間的な扱いを求める野間宏の思想の現われとしてよいだろう。

6.

戦争から学ぶべきことはあまりに多い。これまで取り上げてきた作品から読みとれるのは、日常の生活ではとうてい体験できない極限状態に置かれた人間たちの体験である。だがこれらによってのみ戦争をとらえても「戦争はひどい、人間を狂わせる。だから戦争をしてはならない」とする感想が生じてくるだけである。この地点にとどまっている限り、戦争を受身的に知るだけで、そして感情的に戦争を嫌悪するのみで、戦争を避けるための手だては得られないだろう。

とすれば個人を強引に極限状態に陥れた戦争を正確に捉える必要があるだろう。そのためには歴史を把握し、国家をはじめとした様々な組織をとらえ、国際関係もそれぞれの民族の立場からとらえ、さらには経済をはじめ、社会の様々な事件も視野に入れる必要がある。そこに人間を登場させる。これを試みた作家がいる。五味川純平である。1965年（昭和40）48歳の時に五味川純平は『戦争と人間』の第1巻を三一新書で刊行した。完結したのは十八年後の1982年（昭和57）の12月で66歳のときであり、新書は18巻を数えた。

昭和初期の新興財閥、満州浪人、満州生まれの日本人、日本人に虐げられた中国人や朝鮮人、田舎出身の青年将校たち、革命を志向する左翼の活動家たちなど多くの人物が日本史年表に記される様々な事件に遭遇する。そして彼らの会話に事件が登場し、彼らの運命が描かれる。作者自身が病気になるためもあって、後半は登場人物たちの描き方が粗雑になり、書き込みが不足している。だが作者の思いは十分理解できる。たとえば『戦争と人間』に添えられた「まえがき」と「あとがき」である。共に「感傷的」と形容のことがつけられている。それらを引用しながら、五味川純

平のわれわれに託す「情念」を知っておきたい。

書き出したら、書き続けるだけである。私が『人間の条件』を発表したとき、自分をよほど懸命だと思っているらしい男が、「コケの一念」と評した。結構である。もう一度頂戴することになるであろう。

(感傷的まえがき)

この決意が生み出されたときのことにも触れておこう。ソ満国境でソ連軍の機械化部隊の総攻撃を前にして、九九式短小銃しかなかった五味川純平の部隊はタコ壺を掘って応戦に備えた。だがもっと生きたいと思う。

私は、その夜、タコ壺の中で思った。幾百万の男女が、この戦争の十数年間に、どれほど愛し合い、求め合い、一度限りの人生が虚しく消えて行くことを、どれほど悶えただろうかと。私は猛烈に人生を恋した。男と女のいる生活の風景を。

(同)

この後の戦闘では部隊の百五十八名中の四名を残して全滅した。この四名の一員として五味川純平は生き残った。「生きてさえいれば、またあえる」として苦学生時代に励ましてくれた女性に会いたくて、ソ連軍の捕虜収容所から脱走して故国に帰る。東京駅の八重洲口から婚家先の電話番号を電話帳で調べ、電話したがその女性はすでに亡くなっていた。

その人の球形の墓碑の前で、私は考えた。私が手とり足とりして教えた初年兵はみな死んだ。私が会いたい人と念じていた人もまた死んだ。人の血で汚れた私は生き残った。おそらく、動物的な警戒本能と無慈悲な闘争に耐える神経だけが、私の中で極度に研磨されたせいである。そういう人間だけが生き残りをえた。無神経な、無責任な、無節操な人間と同じように。それでは、私たちの生きてきた時代は何だったのか！

私は計画を先へのぼしていたテーマに、急に対決しなくなった。

(同)

戦争にふりまわされた人間はすでに『人間の条件』で描かれているが、個人的な部分からの告発でしかない。それを心得ての計画である。

戦争と人間の、多様な重層的な、錯綜した、いのちがけの、しかもときにはきわめて無意味な諸関係に

は、ほとんど筆が及ばなかったことを自覚せずにはいられなくなった。

(同)

シベリアの日本人墓地にも訪れた後に計画に着手したのである。そしてそのときの心情を吐露する。

一つには死者たちの沈黙に心を引き裂かれるからであり、もう一つには、語ることの永久にできない世界へ追いやられた人間も、生きていながら知ることのできなかった人間も、猿まわしの猿以下でしかなかったと思う痛恨からである。

(同)

およそ自らの死を容易に想像し得ず、これから生きんとする若者が、正面から具体的に自らの死に直面させられた事実、日本軍という組織の中にあつて、非合理的な殺人を強いられた事実、被害者と加害者の両面を担わされ、さらに非戦闘時下での逃亡のために殺人を繰り返しながら生き続けなければならなかった事実、こうした運命に放り込まれたと知れば、呪われた運命への憎しみは倍加される。従って五味川純平が歴史的状況を把握しながら小説を書くのは当然のことであろう。この「まえがき」で宣言する。

私は、自分の体験によっても、この仕事のための調査の結果からも、国家のためと称して戦争を発起した人びと、その結果をものものしい言葉と強権を持って「指導」した人びとを、一切信用しない。けれども、彼らの在り方については、想像力の及ぶかぎり理解の目をとどかせなければならない。批判することも非難することも簡単である。彼らと作品の中で生活を共にすることは、簡単ではなからうと思う。被害者と加害者とは、別個の原則がある。被害者でありながら、同時に加害者でもある者もまた、別個の原則の制約下にあるはずである。

(同)

こうして『戦争と人間』は先にも記したように十八年の間書き続けられた。五味川純平の調査の現れとして、たとえば2.26事件の註は新書版一冊の三分の一を占めているし、日中戦争のきっかけやそれに関わる御前会議の内容も註で触れている。作者として主人公たちをふりまわすものすべてに関わって明らかにする。

書き終わってからの、五味川純平の「感傷的あ

とがき」を引用しながら「情念」をさらにみておきたい。書くべきことを書けなかったことに悔やみを残している。

妻が病気に倒れたころ、私はこの十八巻を書きはじめていた。計画では、東京裁判まで書ききって、終わるつもりであった。だが、そこにどうしても出廷していて、尋問を受け、判決を受けなければならぬはずの一人の人物が、東京裁判の埒外に置かれていて、のうのうと暮らすことを許した裁判は、ほとんど無価値に近いと思うようになった。書くなら、徹底的に調べ直して、東京裁判が茶番にすぎなかった理由、経過、その後の影響を書き尽くさねば、ペンキ屋が歴史に下手なペンキを塗るに等しいことだと考え直した。

(感傷的あとがき)

執念とも言うべきものが、未だ五味川純平の胸中に渦巻いている。そして現在の日本の状態を断罪している。

生きていて、少しも愉しくない。それは必ずしも妻を亡くしたからでも、世代の怒りを共にする友人が少

ないからでもない。国も同胞の大部分も、大小の悪事をごまかすことを正念場と考えているからであり、悪者のみが栄えて権勢をふるい、少数の正直者、善悪の区別を知って悪に荷担しない者は、悪者たちの残飯で辛うじて生きているという。情けない、みっともない状態がこの島国全土を弊っているからである。

ペンは剣より強し、と、昔の賢人が言ったそうだが、果たしてそうか、私の眼にはペンは邪剣に奉仕するに忙しいようである。

(感傷的あとがき)

もうこれ以上書き続ける必要はないだろう。戦争は天災ではない。どんな戦争でも野望に満ちた少数の人間たちが引き起こしたものであると断言しよう。それがどんなにもっともらしいスローガンや大義名分が掲げられようとも、巧みな言葉でカモフラージュされているはずだ。戦争が最も効率の高い消費経済であることに注目すれば一目瞭然である。だからそのもとで行われる政治は、個人がそれに無関心であっても、個人を捉えてはなげずに執行される。

(ささき とおる 教授)

(1996. 6. 7 受理)